3　コロンビア

ポンチョのルーツ——アンデス高地民族の日常着

幡谷則子

コロンビアのインディヘナ

インカやマヤのような壮大な古代文明圏の外にあった現在のコロンビアに残存するインディヘナ（先住民）文化について、日本ではあまり広く知られていないのではないだろうか。実際、首都ボゴタ（一九九一年九月の憲法改正後、正式名称はサンタフェデボゴタになった）、その他の主要都市を歩く限り、メキシコやグアテマラなどではごく自然に行き交う「インディヘナ」（一般的にはインディオといわれることが多いが、これは差別用語とされてきた）と一見してわかるような姿の人々に遭遇することはまずない。

本来この国も他のラテンアメリカ諸国と同様、「メスティーソ（混血）」の国である。一九八五年の人口センサスによる人種構成は、メスティーソ（白人とインディヘナの混血）五八％、白人二〇％、ムラート（白人と黒人の混血）一四％、黒人四％、黒人とインディヘナの混血三％、インディヘナ一％となっており、混血人口が大半を占めている。しかしながら、この混血の度合いに

ついてはメキシコのような典型的な混血文化の国々とは異なるように思われてならない。筆者の見たところ、白人（褐色の強い人々も多いのは確かだが）とカリブ系黒人が実社会の表面にたっている国としての印象が極めて強い。

混血度が薄いか濃いかの議論は別に譲るとして、全人口（推計三千数百万人）の一％というインディヘナの存在は希少である。歴史家によれば、スペイン人による南米大陸征服時には二〇〇万人いたというインディヘナは一九八二年の数字では四万五〇〇〇人に激減している。しかも、彼らは、一部の農耕部族を除いて、一般市民社会からは隔絶した辺境の地、すなわち、アマゾン地方、アンデス奥地、そしてヴェネズエラとの国境をなす最北端グワヒーラ地方に棲み分けしている。これでは街頭で簡単にお目にかからない道理である。

ポンチョのルーツ

はじめにインディヘナについて述べたのは、希少でコロンビア社会では目立たない存在ではあれ、彼らの文化が現在もなお日常生活に生かされていること、そしてその端的な例が今日の農民の最も典型的とされる労働着に残っていることを述べたかったためである。

全人口の一％とはいえ、コロンビアに現存するインディヘナの棲み分け、文化圏は多様である。一九八二年現在、七七のエスニック・グループが確認され、これらは一二の語族（チブチャ、ケチュア、アラワク等）に分類される。あの「エル・ドラードの秘跡」の伝説で有名な「チブチャ族」は実はエスニック・グループの名称ではなく、「チブチャ語族」なのである。七七のエスニ

コーヒー農園者の肩にかつがれたポンチョ
（アンデス中央地帯，ガルダス県にて）

ック・グループは、上記の三つの地方の地勢と経済活動（生業）によって大別される。すなわち、アンデス山中深く、農耕と若干の牧畜を営むグループ（全体の約六四％）、アマゾン奥地を中心に、国境地帯に棲み、漁労・狩猟を生業にするグループ（二六％）、そして山羊・羊主体の牧畜で専ら生計をたてるグワヒーロつまりグワヒーラ族（残る一〇％）である。

ここで取り上げる「ポンチョ」（poncho）は、以上のインディヘナ文化圏では最も大きな居住圏を形成しているアンデス地方に棲むエスニック・グループの代表的な日常着である。ポンチョはすでに我々にも愛着のある響きをもつ言葉であるが、これを辞書で引くと、「アンデス高地の原住民の用いた貫頭衣」等とある。「貫頭衣」は文字どおり、一枚の布に頭を通す穴をあけただけの袖のない、恐らく最も簡単な衣服であろう。

ポンチョの起源が現在のコロンビア領内であったかどうかは筆者の知識の領域外である。コロンビアに限らず、この貫頭衣は、ペルー、ボリビア、エクアドルなどのアンデス高地社会には典型的に見られる衣の文化である。征服者スペイン人が、裸族であった先住民インディヘナを文明化し、衣服着用を習慣化させる意図で最初に与えたのがルアーナ（ポンチョと同義）であったという。となると、「ポンチョ」の起源は純粋にインディヘナ文明に求められるかどうかは疑わしくなる。いずれにせよ、アンデス地域のインディヘナが通常用いる仕事着・防寒着であり、それが現在のコロンビアにもアンデス・フォルクローレの一環として継承され、かつまたアンデス地域の農民社会にも、最も代表的な日常着として用いられ続けているのである。

ボガヤ県にて

パイサの衣文化と農園労働者の労働着

これまで、アンデス・インディヘナ裸族の文明化による「ポンチョ」のルーツを述べてきたが、最後に現代の農民・農村労働者の仕事着として定着している「ポンチョ」を見てみよう。

一口にポンチョといっても現在使われているものにはさまざまな形態があるようである。素材

も羊毛から木綿のものまで、また本来は防寒の用途が大で膝丈であったものが、腰までの短い、装飾的な形のものもある。基本的には、暖かく、手や腕が自由に動かせ、かつ携帯に便利で、膝かけや腰掛け、はては野宿の寝具としても使用可能である。すなわち、ポンチョは、簡便かつ機能性・応用性に富む極めて効率的な労働着であるといえよう。

コロンビアのアンデス山系に囲まれたコーヒー生産地帯、アンティオキア県を中心とする地域一帯に住む人々は「パイサ」(paisa) と総称される働き者で、アンティオキア商人資本も、それによって発展したコーヒー栽培も、コロンビアの初期産業発展の原動力となった。このパイサの農園主、農業労働者の典型的な出で立ちはこのポンチョなしには語れない。

筒型ズボンと長袖シャツ、その上に短めのポンチョ、そして帯。肩にはカリエールと呼ばれる三段切り替えのショルダーバッグと木綿の肩かけ。腰にはマチェテ（作業用刀）の入った皮の刀筒。口髭を蓄え、首にはバンダナを結び、ソンブレロをかぶり、皮のブーツでろばにまたがれば、いっぱしのカフェテーロ（コーヒー農業者）である。

（はたや　のりこ／アジア経済研究所地域研究部）